

東京文化財研究所 編

龍華寺 菩薩半跏像

美術研究作品資料 第四冊

◇ はじめに ◇

近年、美術への関心は多様化し、歴史、宗教、文学などさまざまな分野が美術作品を資料として扱うようになり、美術作品はもはや美術史固有の研究対象ではなくなりつつあります。それに伴い、美術に関する質の高い資料を幅広く提供することが求められてきています。

その現状を踏まえ、東京文化財研究所では、美術史研究のための基礎的、かつ、上質な情報の収集に努め、積極的に公開してまいりました。それとともに、美術作品の特性を活かしながら正確さや信頼性、あるいは、網羅性など、いくつもの厳しい条件を満たす新しい資料学の構築にも取り組んでいます。

二〇〇二年より画像資料を中心とした美術資料をまとめた『美術研究作品資料』の逐次刊行もこれに連動するものです。

その第四冊目となる今回は、神奈川県・龍華寺に伝来した天平時代の脱活乾漆造の菩薩半跏像をとりあげます。本像は平成十年に龍華寺の土蔵から偶然発見されたもので、その後、修理を経て往時の姿に復することとなりました。本像の詳細な調査で得られた情報は、日頃、精査する機会が限定され、いまだ不明なところを残す天平時代の脱活乾漆造の技法を解明するうえで貴重となると考えますが、その研究成果をまとめたのが本書です。刊行にあたり、龍華寺をはじめとして関係各位に感謝を申し上げます。とともに、本書が研究資料として広く活用されることを願っています。

二〇〇七年五月

独立行政法人国立文化財機構

東京文化財研究所長 鈴木規夫



【菩薩半跏像 全身 正面(修理後)】

■ 体裁

B4判 上製函入  
本文二〇〇頁

■ 定価

一九、九五〇円(本体一九、〇〇〇円+税)

ISBN978-4-8055-0547-2

C3071

中央公論美術出版

<http://www.chukobi.co.jp>

〒104-0031 東京都中央区京橋2-8-7

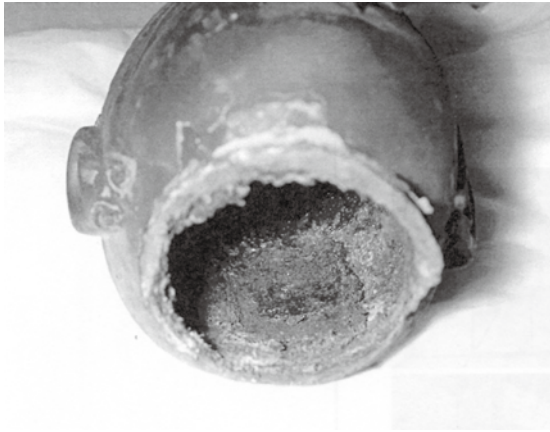
電話 03-3561-5993 FAX 03-3561-5834

お取り扱いは

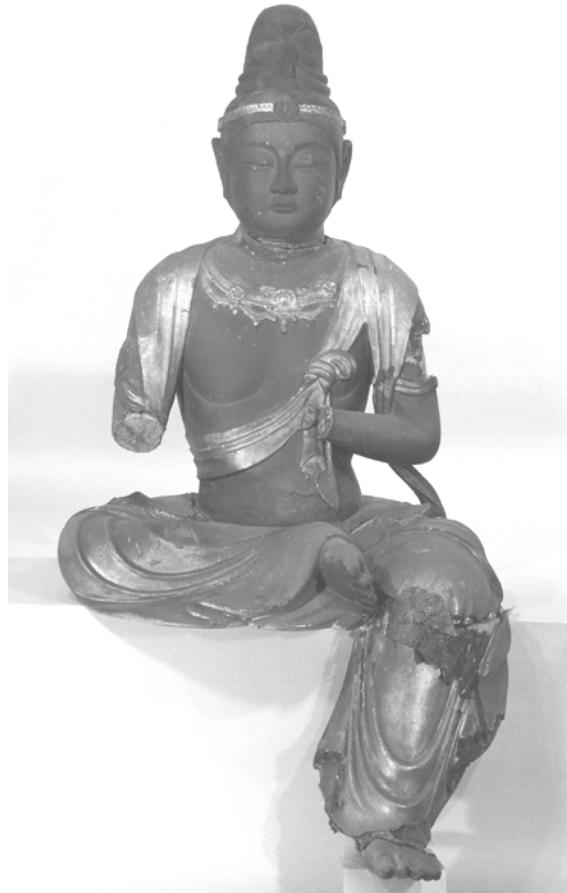
天平時代の脱活乾漆像の東限を大幅に塗り替えた本菩薩半跏像は平成10年に横浜市金沢区の龍華寺境内土蔵から偶然発見された。発見時、頭、体、四肢が分離していたため、精査する機会が限られ、いまだ技法に不明なところを残す作例の貴重な観察をすることが出来た。その後、修理を経て往時の姿に復することとなった調査報告。



23 菩薩半跏像 頭部内 頭部の造作(修理前)



24 菩薩半跏像 頭部内 後頭部の造作(修理前)



【菩薩半跏像 全身 正面(修理前)】

## 横浜・龍華寺蔵 脱活乾漆造菩薩半跏像をめぐる知見

天平時代の彫像において木心乾漆像と脱活乾漆像が当代の造形を主導したことは周知の通りである。前者は心木に漆木屎を盛り付けて塑形するのに対し、後者は塑土で成形した原型の表面に麻布を数層にわたって貼り固めたのちに、塑土を除去し、像表面を漆木屎で塑形したものである。両者の大きな相違は後者が中空となるため前者より重量が圧倒的に軽減される点にある。その脱活乾漆像は現存作例の多くが東大寺・興福寺を中心に法隆寺、秋篠寺、薬師寺といった南都の官寺、および、これに準じる大寺に伝存しており、かの技法による造像が官営の造仏所主導でなされたことを示唆する。このことは天平時代にあつて漆が高価であつたことも無関係ではなさそうである。

ところで現存の脱活乾漆像の作例の分布に目を転じると、西限は香川・願興寺観音菩薩坐像であり、東限は岐阜・美江寺十一面観音菩薩立像であつた。ところが、平成十年(一九九八)六月二十三日、横浜市金沢区洲崎町の龍華寺(真言宗御室派)の境内土蔵の改築に際して、庫内の整理中に頭、体、四肢が分離した状態ではあつたが、天平時代の脱活乾漆造の菩薩半跏像が発見され、分布の東限を塗り替えることとなつた。この事実は同年十月五日に至り横浜市教育委員会により新聞発表というかたちで公表され、新聞各紙はこぞって東日本における初めての脱活乾漆像の発見であることを見出しに掲げて報道がなされた。関心がその点に集中したのも事実であつたといえよう。

しかしながら、新聞各紙の反響とは別に龍華寺菩薩半跏像が彫刻史研究者の間で関心を惹いたのは、発見時に頭、体、四肢を分離し、かつ破損していたため、かえって断面や像内の様子を具体的に窺うことができ、日頃、精査する機会が限られ、技法にまだ不明なところを残す天平時代の脱活乾漆造を実際の作例で仔細に調査し得る数少ない機会を提供した点にあつたことはいまでもない。